

牧師室から (2021.6.13)

ある夜、教会の前の方の椅子に座っていた時のことである。右側の窓にヤモリが登っていた。多分外の壁に設置された十字架を照らす電燈に虫が集まり、その虫を取るために窓から登っていくのだろう。五つの指を広げて四つ足で直角の窓に良くもくっついていて、ゆっくり動く姿がかわいい。

元々私は爬虫類が好きではなかった。今は新築してモダンな建物になっているが、私が学生時代に住んでいた東京神学大学の昔の学生寮の裏は ICU 大学に繋がる森があって、色々な虫や鳥、動物がいた。飼い主が分からない鶏のつがいや遊んでいるのをよく見かけた。草の上に卵を産んだのを拾ってきた学生もいた。かわいい野良猫たちもいた。誰かが餌を与えていたのであろう。また、コウモリが寮の廊下に入って来て飛び回り、大騒動になったこともあった。そしてある日、蛇が玄関に入って来て、中にいた女学生たちはパニック状態になったよう。しかし、毒蛇ではなかったようで、勇気ある女学生が上手に握って庭に置いたようである。外出から帰ってきた私に武勇談のように興奮して一人の学生が話してくれた。私は逃してくれた後輩に、もっと遠いところに捨てればよかったのに、なぜ近くの庭においたのよ、と笑い話ではあったが、厚かましいことを言ったことがある。

女子寮は一階であったことでもあるからか、夏の夜になると、大きな窓に大勢のヤモリが、くっついて動いていた。その時はとても嫌だった。しかし、身近で、毎日眺めているうちに親しみを感じるようになった。面白い姿である。人間に害がある昆虫も食べてくれることから、家を守るという名前がつけられたよう。この間の教会でのヤモリを見ながら、東神大での思い出と共に、神様が造ってくださったものの愛おしさを感じた。

人間の側から考えてみると、虫や動物の弱肉強食の世界は冷酷で残忍なところがあるが、それも与えられた命を一生懸命に生きるための本能的な彼らの生き方である。しかし、人間は違う。神様の息が与えられている私たちには、弱いものをいたわり、この世の自然界を神様の愛に従って管理する責任があるのだ。

今、私たちを苦しめているコロナ禍の中で、命あるものとどのように向き合い、どのように共に生きるべきかが問われている。この問いに真剣に答えていくことができるならば、この試練も益に変わる日がきっとくるだろう。

命あるものの美しさを通して神様を讃美しながら、わたしたち人間に向けられた神様の憐れみにすがりつく気持ちである。

(鈴木善姫牧師)